



Title	悶え神の政治学：大震災以降の神戸が語る戦争と越境
Author(s)	川越, 道子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57894
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【11】

氏 名 川 越 道 子
かわ こえ もちこ

博士の専攻分野の名称 博士(文学)
学位記番号 第 23465 号
学位授与年月日 平成22年3月23日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
文学研究科文化形態論専攻
学位論文名 潟え神の政治学－大震災以降の神戸が語る戦争と越境－
論文審査委員 (主査) 教授 富山 一郎
(副査) 教授 杉原 達 教授 川村 邦光

論文内容の要旨

本論文は、序章も含め全八章の構成からなる。内容は、神戸市長田区の歴史的な系譜と、そこに流入し生活を築いていった、奄美出身者、沖縄出身者、在日朝鮮人、在日ベトナム人たちの移動の記憶を重ね合わせながら、地理的地域に収斂しない複数の歴史の束として、長田という街を描き出すものになっている。とりわけ在日ベトナム人については、ベトナム戦争の記憶と長田での日常が焦点になり、また長田という場所にかかわっては、阪神淡路大震災が住民にとっていかなる出来事だったのかということが、全体を覆うテーマとなっている。構成としては、序章ならびに第一章において、先行研究の整理ならびに理論的フレームワークの提示を行い、第二章から第四章までには長田という場所において異なる出自を持つ複数の人々が交錯しながら生活を作り上げていった過程が、綿密なるフィールドワークをもとに検討され、第五章と第六章では、在日ベトナム人の戦争ならびに移動の記憶が、丁寧に聞き取られた個人のナラティブ、ならびにベトナムでの長期にわたる調査をもとに検討されている。また最後の終章にあたる第七章では、全体にかかわる長田での調査、ベトナムでの調査において語りだされたナラティブが、語り手と調査者である川越氏との具体的な関係性や出会いの場面において生成させている意味について検討されており、その作業を通じて、序章と第一章で提示された理論的枠組みの意義が、再度明かにされている。以下、本論文の理論的、具体的諸点を三点に整理して述べる。

まず、序章ならびに第一章で検討されている、表題でもある「悶え神」という設定について述べる。この用語は作家石牟礼道子から引かれているものだが、川越氏はこの用語を、『苦界浄土』をはじめとする石牟礼道子の水俣に関する記述を定義づけるものとして注目する。すなわち、石牟礼の記述についてはこれまでにも、ルポルタージュという手法やサークル運動の中で検討されてきたが、こうした石牟礼をめぐる先行する議論をふまえながら、川越氏は、ジュディス・バトラーがメランコリーの概念をめぐって提示した欠如と言葉の関係、とりわけバトラーの『生のあやうさ』に如実に見られる、2001年9月11日以降に浮かびあがる廃墟を前にした不安定で遂行的な言葉の概念を、石牟礼の記述の理論的枠組みとして考察している。またこの欠如と言葉の関係は、本論文では具体的には、戦争と震災にかかわる記憶の問題である。

第二点として、第二章から第四章において焦点化されている労働と生活について述べる。上記のような欠如を前に遂行的に展開する言語行為を日常生活において検討する際、本論文で具体的に焦点があてられているのは、労働の世界である。そこでは長田という場所めぐるケミカル・シユーズの製造、養豚、酒の密造、臓物交換といった事柄が密度の高い聞き取りとともに検討されている。多くの移住者が住む長田であるが、これまでの研究ではその出自をめぐる差別が強調され、階層化された労働の世界が問題にされてきた。川越氏は、出自における差異や差別を念頭におきながら、こうした境界が日常的な食生活や、労働という実践においてたえず搅乱され、新たな関係性が生成していることを明らかにしている。すなわち、先に述べた震災や戦争をめぐる遂行的な言語行為とともに、こうした関係生成的な日常性の検討や労働過程分析により、川越氏は、移民たちが持ち込んだ複数の

系譜が決して固定的ではなく、食をめぐる欲望や労働での身体的実践において、新たな意味と関係性をたえず生み出していることを、描きだしている。

第三に述べるべきは、最初に述べた「悶え神」という設定を、聞き取り調査における聞き手としての川越氏自身に引き付けて、再度問題化している点である。かかる点において川越氏は、分析枠組みの提示を急ぐバトラーよりも石牟礼に近い。本論文を構成するのは他者の語りだが、それを聞き取る自分自身の語りをそこに重ね合わせることにより、他者のみに占有された欠如ではなく、欠如を前にした語り手と聞き手という方法論的介入を、最後に行なっているのである。そこでは経験を持つ当事者と経験を持たない聞き手という区分ではなく、欠如を前にした両者の経験の錯綜が浮かびあがる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、長田ならびにベトナム農村での長期にわたる聞き取り調査と資料収集にもとづいた、移動の経験と記憶にかかわる地域研究といえる。ある場所に移動してくる人々の抱え込んできた経験や記憶と、その場所での日々の労働や日常生活とが一つの場所の歴史として描かれる中で、これまで概念的には主張されつつも実際の記述としては不十分であった、出自や主権的存在において代表されることのない複数の歴史記述というものが、本論文においては見事に成功しているといってよい。またこうした記述自身が、出自や民族集団、あるいは主権的存在において構成される政治概念とは異なる政治領域の可能性を見出していく実践でもあるだろう。それは、本論文でも言及されているバトラーの遂行的で搅乱的な政治、あるいはシャンタル・ムフやエルネスト・ラクラウなどがヘゲモニー的実践の中で検討した「縫合」という概念にもかかわるものであるが、本論文は、こうした概念を、文字どおりきわめて密度の高い聞き取り調査において具体化している。またこうした記述においては、記述者自身の遂行性ということが、たえず問題にならざるを得ないのであり、理論的作業が先行してしまうバトラーやラクラウとは違い、自己言及性も具体的な歴史記述に織り込むことが、本論文では試みられている。また本論文が方法論として採用する欠如と言葉の関係は、戦争と震災にかかわる記憶の問題であり、そこでは、圧倒的な欠如を前にした語り手と聞き手の言葉のやりとりにより遂行的に新たな意味が生成していることが、具体的に述べられている。石牟礼において実践され、バトラーにおいて理論化された記述の方法を、川越氏は「悶え神の政治学」として検討し、本論文の方法論としているのである。もっともこの点については、記述の方法やバトラーにかかわる理論的作業において課題を残しているといえよう。しかしながら、課題を残しながらも、戦争と震災という出来事をめぐるこれまでにない歴史記述に成功しており、よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。